

人間の経済

第2期 第 **19** 号 (通巻97号) 2005年5月20日刊

目次

地域通貨から経済の貨幣的分析へ (3)

森野 栄一

遠近と信用

高橋 晋 / 森野 栄一

[wija/iWAT Tips]

iワット、統計情報の送り方

森野 栄一

地域通貨から経済の貨幣的分析へ（3）

森野 榮一

投資誘因もう一度

つまるところ、ケインズにとってカレッキのように事は単純ではありません。追加的貨幣需要に経済システム内部で適切な融資が行われると仮定する以前に、貨幣需要増をもたらす諸要因、わけでも投資誘因を決めている事情が重要なのでした。

この投資誘因が何に依存しているかを考える場合、事情は複合的であることを認めざるをえません。単に利潤率に依存しているというよりは、それに加えて利用されざる生産能力やどれほど利用しうる金融資源があるかにも依存していますし、それらの組み合わせのなかで事は決まってくることでしょう。

例えば、利潤率が高く、未利用の生産能力が小さいとすると、この場合、投資誘因は強いということが出来ますし、完全雇用の条件下で極度に達するかもしれません。これは誰がみてもありそうに思えます。しかし、同じようにありそうなことは、最も好都合な条件を仮定しているこの場合でも、投資誘因は有限であるでしようし、むしろ制限されることも考えられます。この条件の下でも、大規模な公共投資の実施のような強制投資は、その目的が、仕事を、従って所得を提供することではない場合には放棄されなければならないでしょう。もちろん投資が実際に有用で、生活水準を引き上げるような場合は、もちろん異論があるわけではありません。しかし消費の側面を経由して資金が流通するほうが、それには投資の増加が従いますから、よりよいということになりましょう。

投資誘因について、少し整理しておきましょう。

所与の時点での、あらゆる種類の資本の総量を K とします。これには貨幣は含まれません。また、 B を完全雇用の条件下での産出高とします。そうすると、 $\beta K = B$ と仮定できます。ここで、

係数 β は資本の生産性ですが、技術発展の状態と利用しうる労働総量及び週当たり（あるいは年当たり）の労働時間数によって決まってきます。さらにこう仮定しましょう。現存の資本に対する新規資本追加（ dK/dt ）の上限は投資誘因によって決まるとしましょう。そうしてこの上限を ρK で示します。ところで投資にとって好都合な条件とは利潤が極大であること、現存設備の完全稼働、利用可能な十分な資金（貯蓄）が存在することです。こうした状況でも、新規資本への投資が時間の単位でみた ρK に届かない不思議な現実があるのです。なぜでしょうか。ケインズはそれを示唆しているように思えます。「われわれがあらかじめ有利に準備しうる消費は無限の将来にまで延期することはできない」（『一般理論』）からです。つまり、投資誘因を決める究極的な事情、物理的な理由の存在なのです。まことに、「われわれの社会組織及び企業組織は、将来に対する金融的準備と将来に対する物理的準備を分離しており、したがって前者を確保しようとする努力は、必ずしも後者を伴うものではない。」（前掲）のです。

ここでさらに、 ρ が β の関数で、それも単調に減少していく関数であるとしましょう。生産手段がほとんど存在しないような原始社会では、それは顕著な資本増加にとってたしかに有用でしょう。しかしこの条件下では、小規模な生産と低い生活水準からもたらされる相対的にわずかな貯蓄は K において実際に実現された増加量は ρK と等しくないでしょう。それで、 $\dot{K} < \rho K$ となります。ここで、 \dot{K} は dK/dt を意味しています。そこで完全雇用条件下で、 $\dot{K} = \rho'' K$ を定義してみましょう。

それは、資本が増加し、さらにより効率的となると、仮定上、 ρ は減少しますし、また消費性向が減少すると、貯蓄率は相対的に上昇しますから、

$\dot{K} = \rho K$ 、それゆえ $\rho = \rho''$ のときに存在することになるでしょう。さらに ρ'' が漸次的にのみ変化すると仮定すると、そう遠くない時期に、完全雇用、すなわち

資本額は、 $K_t = K_0 e^{\rho'' t}$

生産量は、 $B_t = B_0 e^{\rho'' t} = \beta K_0 e^{\rho t}$

消費は、 $A_t = A_0 e^{\rho'' t} = \alpha B_t = \alpha \beta K_0 e^{\rho'' t}$ 、ここで、 α は消費性向です。

貯蓄はイコール、生産から消費を引いたもの、それは、資本の増加に等しく、 $\dot{K}_t = \rho'' K_t = \beta(1 - \alpha) K_t$ です。したがって完全雇用均衡の条件は $\rho \geq \rho'' = \beta(1 - \alpha)$ となりましょう。

社会が十分に原始的であるかぎり、 β は小さく、 α と ρ は大きいでしょう。完全雇用は事物の自然状態ともいえます。しかし困難が出現するのは、 β と ρ における上昇の影響で、また α があまりに削減されてきて、 ρ が $\beta(1 - \alpha)$ に等しくなったときでしょう。 β がさらに大きく増加するとき、それは避けがたいことではあるでしょうが、均衡は乱されることになりましょう。不完全雇用を通して、実現された β 、それは β' ですが、減少し、この場合、 α' で示される消費性向は増加し、それで、 $\beta'(1 - \alpha') < \beta(1 - \alpha)$ という関係を得ることになります。

投資誘因も弱まりますので、 $\rho' < \rho < \rho''$ となりましょう。しかし、明らかに投資誘因における減少は資本の生産性や貯蓄性向のもたらすものよりは相対的に小さいものですから、どこかで、 $\rho' = \beta(1 - \alpha')$ である新たな均衡が達成されるでしょう。

これで前節で引用したケインズの指摘が少しは明瞭になったかもしれません。

投資向け融資の問題

ケインズは「利子率の '事前' 理論」で、

投資家が投資を決意するとき、彼は二つのことを確認しなければならない。一つは、投資が行われる生産期間中に十分な短期融資を得られるか、二つ目は、満足のいく条件で短期契約に長期債券発行で融資し直せるかである

と述べています。これは貨幣が家計や銀行から企業に移転する事実を指していますが、企業や投資家のそれと区別された、

家計の流性選好や銀行のそれが変わらぬままであれば、事後に当期生産が返済する融資に対する事前に当期生産が要求する融資超過（や不足）は利子率高騰（や低下）に導くであろう。（上掲）

とも指摘していて、当期の生産が要求する貨幣需要の過不足を利子率の上下が調整するとしています。ケインズにあっては企業が生産を増加させようとして企業が投資に着手する際に、これに応えるのは家計や銀行で、それらから企業への貨幣の移転が企業の資金需要に応える中味になっているようにみえます。これは企業という借り手の全資金需要ではないにしても、企業の資金需要には、銀行が信用創造で預金を生み出すことで応え、その分、貨幣ストックが増加するとするカレッキの作業仮説とは対照的にみえるでしょう。

こうした姿勢の違いは、実物部門と貨幣（金融）部門の間関係の理解に異なった見解をもたらしていくように思えます。つまり、ケインズが明らかにしたように、貨幣需要は取引、予備、投機の三動機から出てきますが、諸動機うちの一つにおける変化があった場合に、それを埋め合わせるために、他の諸動機のいずれか一つか、あるいはまた、同時にか、あるいは同時に貨幣ストックが変化しなければならなくなります。このことは私たちを、相対価格と資源配分が決定される経済の実物的側面と価格水準が確立されるその貨幣的側面を分離する古典的思考に再度立ち向かわせることでしょう。つまり貨幣需要の実物的側面（これは所得水準に反映します）と貨幣的側面（利子率に反映します）をば結合し直して問題を考えさせるからです。そうして貨幣ストックにおける変化はこの両者（所得水準と利子率）に影響し、経済の実物的側面にも影響を与えることが注目されることとなります。これはもし貨幣部門が混乱するならば実物部門にも混乱が波及することを意味しています。例えば、貨幣に対する投機需要が高まれば、取引需要は低下するでしょうし、それは所得水準の低

下にまで至ることでしょう。

カレッキの場合は、貨幣需要増には対応する信用創造による融資が出てくるとすることで金融部門の位置づけは受動的に見えます。貸付需要に一致する信用が立つと考えているからです。アクションはあくまで実物部門から始まるかのようです。つまり彼にあって信用や預金という貨幣ストックは実物部門の要請に調整されるとされているのです。

しかしカレッキが金融部門を受動的なもののみ捉えているとは必ずしも言えないのも事実です。それは「増加するリスクの原理」と呼ばれるもので、実物部門が支出増を計画する場合、借入コスト増がこれを抑制するばかりか、金融機関は企業が外部から調達する資金につき融資額に最高限度を設け、実物部門に対して力をふるうことができるというものです。これによって企業は貨幣金融部門からの制約を受け、企業の発展が限界づけられるのです。金融部門が信用格付けを導入していることがこれをよく示しているといえるでしょう。こうした投資支出の水準や構造に決定的に作用する信用格付けは、個々の企業や事業が展開される場所や時期によってさまざまに格付けされますが、これが全体としての経済成長に困難をもたらしていくことは容易に想像しうるところです。

ケインズの場合も融資のコストである利子率を貸付側の貸付に係るリスクが異なっている場合も個別企業のサイドからみて考えているようにみえます。この点、カレッキのほうがより、企業規模を限界づける決定的な要因として金融上の制約に力点を置いているようにみえます。ケインズの場合は貨幣の欠乏が資金調達コストである利子率の高騰を通して企業の発展に重くのしかかるとはいえ、融資の制約はただその調達コストによって制約されるとみているかのようです。しかしケインズも金融部門が実効的な利子率での融資を制限する力を持っていること、つまり信用供給の制限により実物部門の発展を阻害する潜在的な可能性を持っていることは、貨幣金融部門が実物部門への能動的な役割を果たしていることをカレッキより強く意識しているわけですから、当然認めている

でしょう。問題はただ強調点の置き方の違いに見えてきます。

(この項終わり、続く)

遠近と信用

高橋 晋 / 森野 榮一

森野:以前、wijaでwija+iWATの開発者である齊藤賢爾さんのプレゼンスを購読していたら、人間は知らない人ほど信用しやすいというパラドックスについて語っておられました。

それで、こうした逆説がなぜ発生するのか考えられました。

たしかに同じ成分の薬でも遠方の異国の薬だと効くように思ってしまうことがありますから、知らないことには期待を抱きやすいという事情があるのかもしれませんが。同時に、近しくて、よく知っている、期待値が低いですから、な~んだあんなもの(あんな奴)ということになりがちです。

高橋:そうですね。このあたりは広告業界が躍起になっているブランドというものの本体とその生成過程にも通じるように思います。

ブランドの機能については、こうまとめられます。

- 商品を詳しく知らない だからブランドに頼る
- 商品をよく知っている ブランドに頼らず自分で選択する

つまりこれだけ商品があふれている世の中で、商品について詳しく知ることはますます困難になっている だから、ブランドに頼って選択するケースが増えている だからブランドというものの価値が増大している、というわけです。

またその裏には、所詮、人は商品を見ているのではなく、商品に反映された自分をそこにしているのだ、ということもいえるかと思えます。

森野:そうですね。これにくわえて、別の事情も作用しているようです。

それは好悪というものです。好きになるということと嫌いになることは同居できません。同時に両者であることはできないわけです。近い関係ほど、無意識的にさえ、この好悪のいずれかが成立しています。人間は嫌(けん)する者を信用しないものです。世評がいくら信用できる人と囃しても、なにが理由をみつけて信用しない理由づけとしてしまいます。つまり、遠い人ほど、この好悪が生成されていませぬので、つい己が彼に寄せる期待と合わせ、信用してしまいがちになるわけです。

高橋:まさにこういうことですね。つまり、彼という存在を自分に都合のいいように解釈して認識する、すなわち「期待しちゃう」わけですね。

森野:はい。これに、利得に訴える事情が加味されると、人は容易に騙されることになるでしょう。

好悪ではないですが、愛と怖れにつき、リアリストのマキャベリはこう言っていました。

愛と怖れはほとんど一緒には存在しえないので、どちらかを選択しなければならないとするなら、愛されるより怖れられるほうがはるかに安全である。」(君主論)

人間には無意識のうちに安全への希求が存在します。好悪はおそらくそれをコントロールするために私たちに備わっているのかもしれませんが。

そこで、信用するという場合、

- 好悪から遠い関係を信じることで安全を確保するか
- 好悪の好のほうに踏み込んで信用するか(これはリスクも高いですね..)

のいずれかになります。

好の強さがよほどでないかぎり、人は前者を選ぶことになりがちです。

そうして、知らない人を信じて、「私馬鹿よね～」となる場合も多いでしょう。

高橋：このあたりは、ソーシャルキャピタル論でいう「弱い絆」になるんでしょうかね。

後者は、狭い共同体の中で閉鎖的に生きざるをえません。ここは人に騙されるリスクは低い代わりにドロドロした人間的よどみになってしまうおそれもあります。もちろん社会的発展という点でも停滞してしまうでしょう。

一方、多様な出会いの中にこそ進歩がある、という観点からすれば、前者こそが社会発展の原動力となるといえるでしょう。

「私馬鹿よねえ～」といいながら、遠い関係につい期待をしてしまうのは、常に新しいもの（進化）を求める人間の本性なのかもしれませんねえ（笑）

またこのあたりが、「人は懲りないものだ」とか「歴史は繰り返す」、といわれることの説明になるのかもしれません。

まあ騙し、騙されながら、人は（そして社会も）成長していくんでしょうかね。

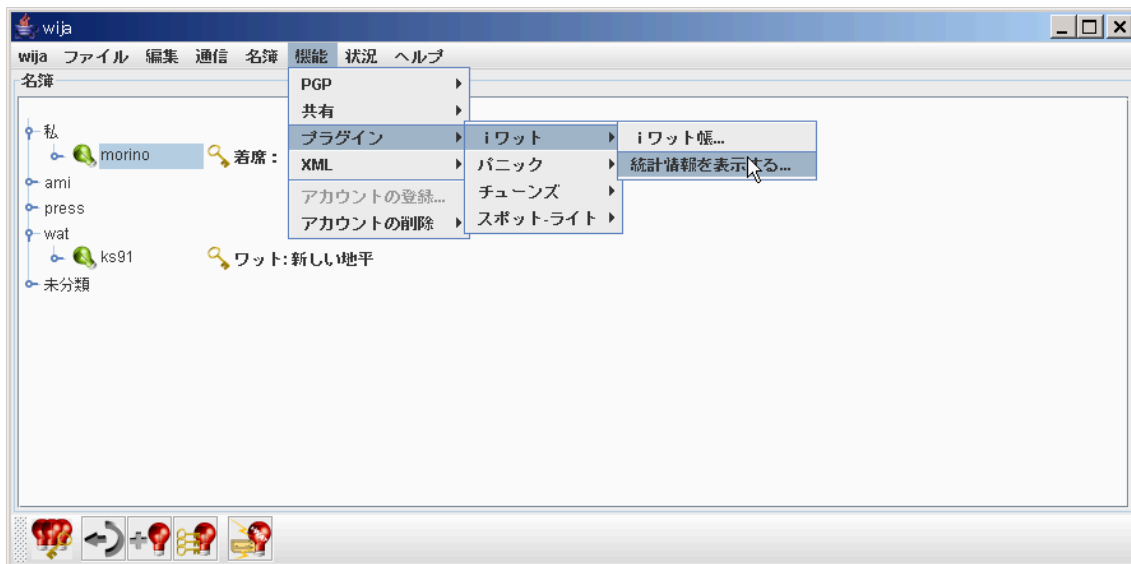
WATtalks ML より

[wija/iWAT Tips]

iワット、統計情報の送り方

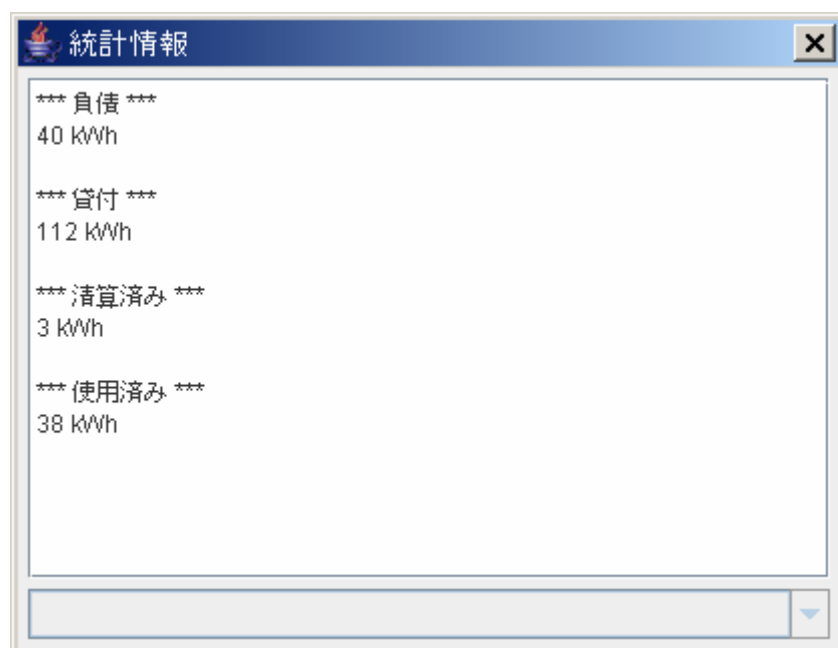
iワットの統計情報を開発者の斉藤さんに送ってみましたので、Windowsでの統計情報送信手順を書いておきます。とても簡単でした。

まず、統計情報を表示させます。

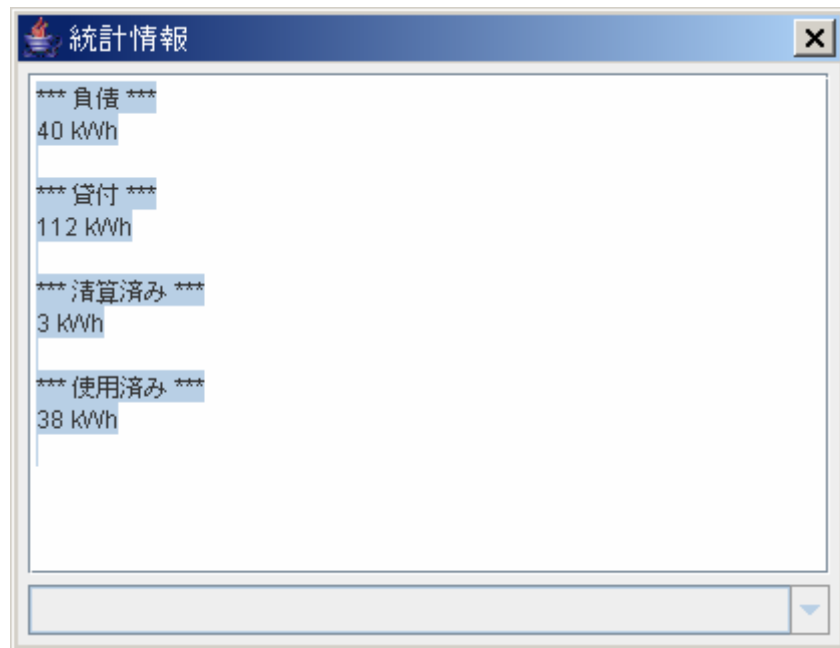


自分の名前をブルーハイライトにして（強調して）、「機能」「プラグイン」「iワット」「統計情報を表示する」を選び、クリックします。

すると、自分の取引情報が表示されます。



マウスをドラッグしてすべてを選択します。こうなります。



これをコピーするために、

コントロールキーを押しながらCのキーを押します。画面上になんの変化も起きませんが、パソコンの記憶域にコピーされています。

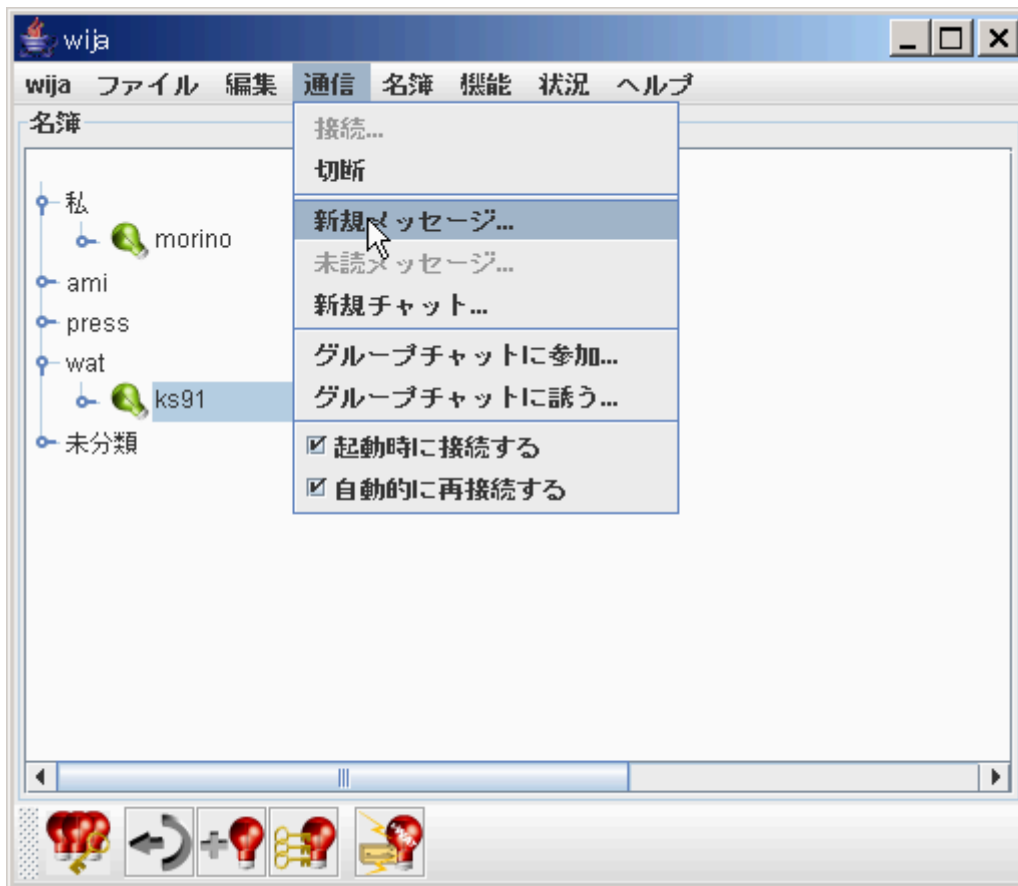
次ぎにこれを開発者に送らなければなりません。

統計情報表示の画面を閉じます。右上のバツテンをクリックします。

そして、wijaの主ウィンドウで、

まず送り先の開発者をブルーハイライト（強調）します。

そうして、「通信」「新規メッセージ」を選びクリックします。



すると、メッセージ作成画面が出ます。



件名のところに、ここでは「統計、山田太郎、050406」と記入しました。ご自分の

名前と日付を書いてくださいね。

そうして、メッセージを書く欄の地の部分をクリックして、コントロール・キーを押しながらVのキーを押してください。



コピーできましたね。

「送信する」を押します。暗号化して送るときはあなたのパスワードを入力する画面が
できます。パスワードを入力してから、「確認する」を押せばOKです。メッセージが届
きます。

ワットの発展のために、統計情報を開発者に送りましょう。プライバシーはなにも侵害さ
れません。

(森野榮一)

編集・発行 **ゲゼル研究会**

221-0021 横浜市神奈川区子安通3-321森野榮一気付

Gesell Research Society Japan <http://grsj.org/> info@grsj.org

Gesell Research Society Japan all rights reserved 許可無く複製・再配布を禁ず